旧湯島聖堂大成殿孔子像復元制作報告書

柴田良貴
中原篤徳

はじめに

本研究は、「美術史料による江戸前期湯島聖堂の研究」に基づくものであり、今回、芸術学、日本画と互いの領域を横断して多角的に旧湯島聖堂について検証を進めたものである。彫塑領域では湯島聖堂大成殿内奥に安置されていた孔子像の復元制作を塑像により行ってきた。研究の目的は孔子像を復元することによって、その全体像を捉え、造像の様子を考察していくものである。また、原寸大の孔子像復元は、具体的な聖堂内の礼拝空間について考証していく上で、非常に重要であると考えている。なお、今回の復元は、今後の研究を見据えたものであり、あくまで雛形的な性格のものであることを付言しておく。

一、旧湯島聖堂大成殿正殿孔子像について

今回、復元を試みた湯島聖堂大成殿正殿孔子像は、関東大震災によって焼失しており、立体としての造形を知る資料はけっして充分とは言えない。現在、湯島聖堂大成殿内には立像の孔子像が安置されているが、関東大震災の後、湯島聖堂復興の際に皇室から下賜されたもので、湯島聖堂創建時に納入されたものではない。では本来の孔子像とはどのようなものだったのだろうか。

大成殿内に安置されていた像は、寛永九年（一六三二）に上野忍岡に建てられた林羅山の塾舎文庫の孔子廟に、尾張徳川家初代徳川義直によって寄贈されたものということである。後に、五代将軍徳川綱吉により湯島の地に規模を拡張して移転することとなり、その際、この孔子像も移座した。

三山進氏の研究によれば、京都七条仏所の記録に第二三代康音が孔子像制作の任に当たったということで、記録では、

「一寛永九年上野弘文院
五聖人御木像奉為彫刻、極粉色玉眼入、
孔子像御長弐尺壱寸中尊
脇立　思子　顔子　曾子　孟子　四体御長弐尺
右者前尾州太守大納言様被為仰付候、

調進大仏師廿三世左京法眼康音作」

とあり、この孔子像が二尺一寸（約六三㎝）の木造、極彩色の像であったことが分かる。平安時代の定朝から続く七条仏所による制作という点から、伝統に則った造像が行われたと考えるべきであろう。

孔子像の具体的な像容を知る資料として、湯島聖堂斯文会蔵の絵葉書（挿図1―3）、新海竹太郎らによって明治期に制作された模刻像（挿図4）が現存しており、おおよその造形の輪郭については知ることができる。像は朝座（あぐら）で正面観照の坐像であり、手は掛と呼ばれる古代中国の挨拶の際の手の組み方が守られている。装束は、中国風の衣装で、ゆったりとしたものであり、頭上には司寇冠と呼ばれる冠をかぶっている。衣の裾は比較的長く、組んだ脚の腿の上面を覆うように垂れ下がり、さらに台座の面で渦を巻くように下がっている。

相貌についてであるが、新海の模刻像からは、皺が刻まれ老年にさしかかった様子が看取される。顔の輪郭は、新海のものも四配像の写真もほぼ同様で、こめかみから下顎のいわゆるエラと呼ばれるところまでほぼ垂直であり、また、額から顎まで大きな面で造形が為されている。つまり、輪郭は正方形に近い四角形を基本とし、はっきりとした面の意識を感ずることができるものである。このことは、非常に強く厳格な印象を像に与えることに成功しており、また立体造形としての強さを同時に与えている。両目は切れ長で釣りあがっているが、やや伏目がちであり、深い思索の様相を表している。体部は頭部との関係から考えると実際よりもやや寸が詰まっているように作られ、仏像や十王像を規範としているように思われる。

二、復元の実際

湯島聖堂大成殿孔子像を復元するにあたっては、諸資料を参考にしながら特に新海竹太郎による模刻像を基本に、塑造による像の想定復元を試みることとした。塑造は粘土をもって行う造形であり、自由に形態を変えられる可塑性が特徴である。孔子像に関する新しい発見や、他領域からの指摘に対応できるように制作する必要があるので塑造が最も復元に適していると考え、プロトタイプとなるような孔子像の制作を試みた。なお、像の大きさは七条仏所の記録にある二尺一寸つまり約六三㎝の像高として、ほぼ原寸大の復元とした。

では、本来の旧湯島聖堂孔子像はどのようにして作られたのであろうか。平安時代中期以降、仏像の材料としては目が通り、美しく、刃物が切れて技術があれば緻密な彫りが可能である檜が用いられるようになった。伝統ある七条仏所の手になる孔子像も、恐らく檜をもって制作されたと考えられる。制作方法としては、木寄法と呼ばれる造像方法が用いられたであろう。木寄法は、一一世紀中ごろ、定朝によって完成されたもので、頭と体の主要部を四本の木材で構成し、結跏する膝は横に並べた二材を寄せ、これらの六材をもって像のおおよそを作り、細部は別材を寄せて完成させるものである。また、仏所の記録に玉眼が入れられていたことが書かれているので、頭部、体部共に完全に内刳りが行われていたと思われる。この内刳りは、用材を寄せ、固定した後荒彫りを行い、それが終了した時点でそれぞれの部材をはずし、中が空洞になるよう刳るのである。内刳り終了後、各部を接着し、さらに仕上げの作業に入る。これにより、像は軽くなり、また木の割れを防ぐことができた。残された写真資料では、四配像（挿図2、3）にそれぞれの個性を

感ずるのはいささか困難であるが、相貌の印象は、仏像の温顔とはかけ離れ、面的な強さがある。孔子像を制作した康音と七条仏所は、様式化された造像の中にも写実性を加味することにより、桃山から江戸前期にかけての清新で生命感に富んだ独特の造形を為したと推測した。今回こうした造形の在り方に留意し、次ぎのような過程からほぼ原寸大の想定復元を試みた。

（一）芯棒制作

孔子像は像高六三㎝の坐像であり、芯棒は高さを六〇㎝と実寸よりやや小さめに設定し、芯棒を組むこととした。斯文会から提供して頂いた写真資料を拡大し、およその輪郭を把握した。中心の芯棒を定め（挿図5）、肩、腰、膝、の芯棒の長さを割り出し、芯棒を組んだ（挿図6）。材料としては、垂木（杉材）、小割（杉材）、棕櫚縄、針金（直径三㎜の銅線）を用いた。

（二）粘土荒付け

芯棒に粘土を大まかに付けていった（挿図7、8）。頭、胴部、腰部、脚部を意識しながら、粘土の量を置いていく（挿図9）。また、急激に粘土付けを行うと、ヒビ等が入り、壊れてしまう原因となるので、小割で軽く形を締めながら制作を行った（挿図10）。

（三）粘土付け

荒付けの後、より形をはっきりさせ、立体としての存在感を強くするための粘土付けを行った（挿図11）。この段階では、裝束も意識しながら、裸身に着せていくつもりで制作していった（挿図12）。また、資料として新たに大倉文化財団所蔵の木造普賢菩薩騎象像を参考に制作を進めた（挿図13）。というのも、絵葉書の写真資料では四配像の輪郭は比較的、丸みを帯びた量感のあるものであり、頭も大きく作られていて、普賢菩薩像に類似した造形を看取することができるからである。普賢菩薩の資料は正面、左右の斜め正面、両側面、左右の斜め背面、背面があり、既出の写真資料を補うのに充分であった。この普賢菩薩は平安時代後期、一二世紀に制作されたと考えられ、定朝の後の円派の手になると推測されている優美な像である。

全体の形を確認し、像のバランスに注意し、量の足りない部分を増し、形作っていった。特に、首の部分が長すぎたので短くし、顎を引いた頭像とした（挿図14）。

（四）粘土仕上げ

全体を整え、さらに衣文等の細部を仕上げた（挿図15）。特に相貌に気を配り、四配像に比べ年配であるように皺を刻み、頬骨をやや出し、眼窩を窪ませた。これは、斯文会蔵の孔子立像の顔の表現を参考にした（挿図16）。衣文は、ともすると彫刻としての立体感を阻害しかねないので、今一度、脚の形に沿っているか注意しながら余分な粘土の量を取り去り、衣装の質感に迫るよう工夫した（挿図17）。

まとめ

旧湯島聖堂大成殿内に安置されていた孔子像の想定復元を試みて、解釈できたことは様式化された中に、造像した者の創意があるということである。恐らく康音によって直接鑿が取られ、制作されたものであろうが、康音は、招来された孔子の小像や絵画を参考にしながら、意匠的には充分大陸風では

あるが、日本独自の仏像彫刻や武家の肖像彫刻で培った造形に基づき、まとまりのある作品に仕上げたのではないだろうか。また、新海の模刻像からは、孔子像が四配像とほぼ同様の像容であること看取されるが、特に顔の四角い面的な表現、腰で結ばれた紐のたなびく様な形、衣文の写実性など、江戸初期における最も優れた彫刻であったことを充分感じさせるものであることを理解することが出来た。

今回は、塑造による雛形的な原型制作であったが、今後、新海竹太郎による模刻像の実見調査も含め、さらに完全な想定復元を進めていくつもりである。

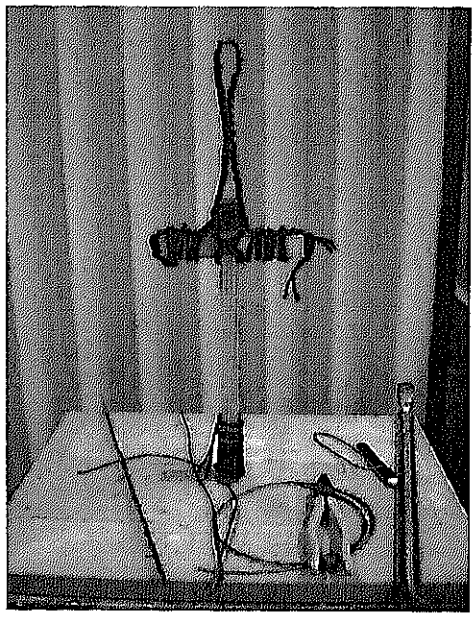
図版

挿図1　《先聖殿孔子像》斯文会所蔵

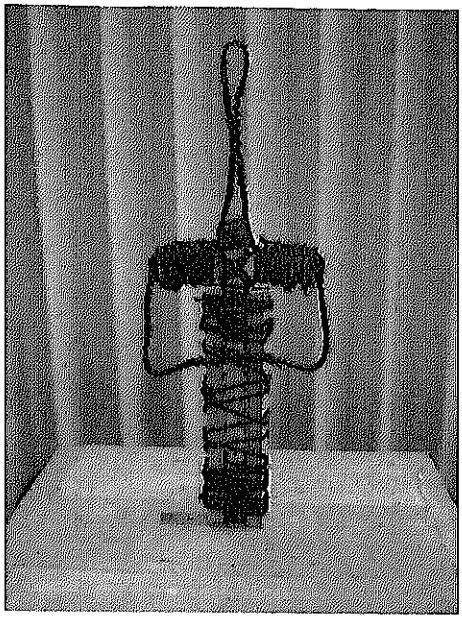
挿図2　《先聖殿四配像》斯文会所蔵

挿図3　《先聖殿四配像》斯文会所蔵

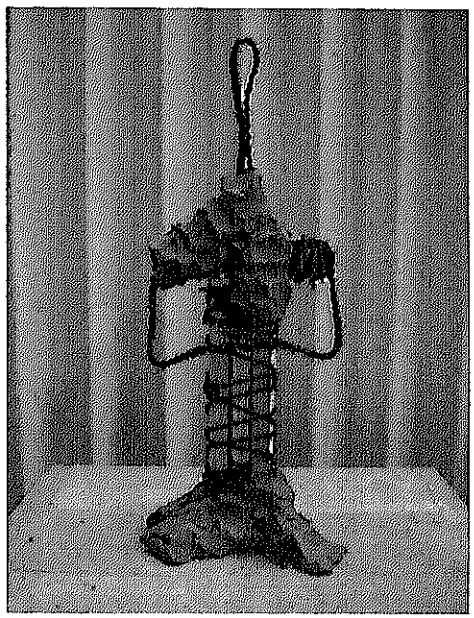
挿図4　《先聖殿孔子模刻像》新海竹太郎作　史跡　足利学校所蔵



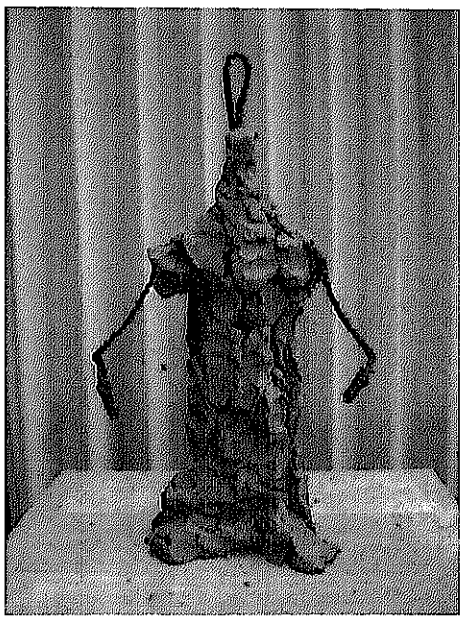
挿図5　芯棒①



挿図6　芯棒②

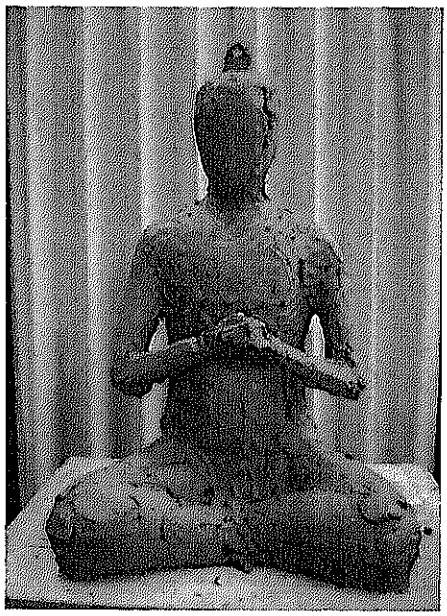


挿図7　荒付け①



挿図8　荒付け②

挿図9　荒付け③



挿図10　荒付け④

挿図11　粘土付け①

挿図12　粘土付け②

挿図14　粘土付け④

挿図13　粘土付け③

挿図16　仕上げ②

挿図15　仕上げ①

挿図17　仕上げ　完成③

完成　斜め左正面

完成　斜め右正面